

第6回 SPARC Japan セミナー2012

「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるのか

～図書館のためのオープンアクセス講座～

開会・概要説明

林 豊

(国立国会図書館関西館)



林 豊

2007年、京都大学に採用、附属図書館に勤務、2011年4月より国立国会図書館関西館に出向。

本日はたくさんの方々にお集まりいただき、本当にありがとうございます。これより、第6回 SPARC Japan セミナー2012 を開催いたします。

私は京都大学から国立国会図書館関西館に出向しており、現在は図書館に関する情報サイト「カレントアウェアネス・ポータル」を担当しています。そこでオープンアクセスによって大学図書館の仕事がどう変わるかという記事を書いたことがきっかけとなって、今回、お声掛けいただきました。

本セミナーの趣旨

2012年度はこれまで5回の SPARC Japan セミナーを開催してきました。学術評価、電子ジャーナルプラットフォーム、科研費の改革、eLife という新しいオープンアクセスジャーナルなどを紹介し、10月に行われた第5回は、オープンアクセスのこれまでの10年とこれからの10年を振り返る場になりました。そこでは生命科学や物理学といった現役の研究者から、

非常にシビアで率直なお話をたくさんいただきました。そのお話は、今後の図書館の役割を考える上で非常に示唆に富んだものだったと思います。発表資料は公開されていますので、ぜひご覧ください。

第6回の今日は「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるのか～図書館のためのオープンアクセス講座～」と題しています。今回のメインターゲットは図書館員です。SPARC Japan セミナーはNIIが主催しているので、図書館がターゲットであることは当たり前のように思えるかもしれませんが、この約10年を振り返ると「図書館」がタイトルに入るのは結構珍しいことです。1年に1度あるかどうかでした。このタイトルには、オープンアクセスという問題を「図書館員のひとりひとりの問題」として考えていただきたいという願いを込めています。

オープンアクセスによって何が変わるのか

オープンアクセスという言葉を知らない大学図書館

員はほとんどいないと思います。が、正直なところ、どうでしょうか。「エンバーゴ」「マンドート」などのカタカナ語や海外の動向の話題が多く、非常に難しいと感じている方が多いのではないのでしょうか。オープンアクセスでは資料がウェブで無料で見られるようになり、「みんなハッピー！」という話だけであれば簡単なのですが、残念ながらそうではないようです。

図書館の仕事の基本は、資料を集めて、それを利用者に提供したり保存していくことだと思います。そこで、例えばこのように考えてみてください。世の中の学術情報が全部オープンアクセスになったら？ 図書館に行かなくても全部ウェブで無料で読めるようになったら？ 図書館に行かなくてもいいだけであれば、電子ジャーナルでも同じことです。その場合には図書館は電子ジャーナルを契約するというかなりヘビーな仕事をしていましたが、オープンアクセスの場合にはその仕事も必要なくなる可能性があります。

契約業務以外の仕事でも、例えばILLや機関リポジトリなどのようにオープンアクセスから直接的に影響を受けるものもありますし、情報リテラシー教育やディスカバリサービスなど、間接的に影響を受ける可能性があるものもあります。また、資料が大量にオープンアクセスで利用できるようになったことで、図書館の資料費が大幅に削減される可能性もあります。あるいは、ポジティブな考え方として、仕事が減った分、何か新しい仕事に挑戦できるようになるかもしれません。また、オープンアクセスによって、図書館ごとに利用できる資料が全く一緒になってしまったとき、大学図書館の差別化はどう行われるのでしょうか。新しい手段の差別化、あるいは協力関係が生まれる可能性もあります。これも興味深い話題です。

私は京大時代、ILLを担当していました。直接的に利用者の役に立つことができている楽しい仕事ではあったのですが、資料をコピーして郵送したり、本を小包にしたり、面倒くさい仕事が多く、オープンアクセスでこういう仕事がなくなったらいいと考えていました。実際にはなぜか仕事が忙しくなりましたが、仕

事がなくなってしまったらどうなるのでしょうか。あるいは、少し青くさいことを言いますが、仕事がなくならなければいいというものでもないと思います。仕事は辛うじてあるけれど、じり貧状態で、やっつけても毎日あまり楽しくないというのは嫌だなと思います。この先もずっと前向きに仕事をしていくためにも、受け身でいるのではなく、オープンアクセスの問題を自分のこととして考えていかなくてはいけないと思っています。

もし、オープンアクセスが利用者にとって本当にいいものだったら、自分たちにどのような影響があるのかもそれを推し進めていくのが、図書館員のメンタリティだと思います。そのような状況で、大学図書館や図書館員の仕事はどう変わっていくのか。研究者は何を求めていくのか。私にはまだまだ見えていないことがたくさんありますが、「何も変わらない未来」だけはないとは言えます。

皆さまには、自分たちがこれまで経験してきた仕事や、今経験されている仕事が、オープンアクセスによってどう変わるのか。仕事が増えるのか、減るのか、あるいはがらりと変わってしまうのか。そんなことを思い浮かべながら聞いていただきたいと思います。そして、心に浮かんだ素朴な疑問を質疑応答の際に発表したり、帰ってから職場で話題にしたり、ブログやツイッターに書いてみていただければ幸いです。

講演者とパネリストの紹介

今日の基調講演1本目は、「オープンアクセスの将来像」というタイトルで、元オックスフォード大学出版局(OUP)のMartin Richardsonさんからいただきます。海外の動向を中心に、ここ15年ほどのオープンアクセスの動向について振り返っていただきます。

2本目は、筑波大学附属図書館副館長の関川雅彦さんより「日本の電子ジャーナルとオープンアクセスをめぐる現在と将来予測」というお話をいただきます。ここでは日本にフォーカスをして、日本の大学図書館への影響について語っていただきます。この前半の部

分で、オープンアクセスについて勉強あるいは復習していただければと思います。

後半はパネルディスカッションを行います。パネリストは基調講演をいただいた Martin さんと関川さん、大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) の守屋文葉さん、旭川医科大学図書館情報課長の鈴木雅子さん、一橋大学附属図書館の小野亘さんの 5 名です。モデレーターを慶應義塾大学日吉メディアセンター事務長の市古みどりさんをお願いしております。守屋さんからは電子ジャーナルの契約、鈴木さんからは機関リポジトリ、小野さんからは社会科学系の単科大学という立場からさまざまな図書館業務について語っていただきたいと思います。

多様なバックグラウンドをお持ちの 5 名の方に、大学図書館の業務がオープンアクセスによってどう変わるのか、熱い議論を行っていただきたいと思います。どうぞご期待ください。